

上行菩薩についての一考察

— 御聖教の所説を中心として —

清水俊匡

初めに

釈尊滅後「法」は滅びるのかの問いに対して弟子たちは釈尊の永遠性を種々に模索しその結果釈尊の肉体は滅したが「法」は永遠であるとして、この「法」を身体とする仏身（法身）をもって仏滅後の問題、即ち「無仏世」の問題を解決したと考えられる。これに対して法華経は本弟子上行菩薩への「法」の付属という形で無仏の時代の救済を上行菩薩が担うという仕方をとつたと考えられる。そこで問題は滅後において入滅の釈尊と上行菩薩とがいかなる関係にあるのかを御聖教を中心に検討する。

久遠釋尊と上行菩薩は一躰である事

當宗の義に云く、聞法と供佛と相望すれば陀羅尼品の初の如くんば聞法了因最勝なり。故に下種は聞法なり、供佛は熟脱なり。諸佛の出世は熟を以て方便と爲し脱を以て正と爲して法華を説く、下種の時は必ず佛果よ

り菩薩位に垂下して菩薩形を以て下種を成す。但し菩薩に於ても小權迹の四依の菩薩は三世に熟益を成じ、眞實の下種は上行の形像を以て之を示す。涌出品の前三後三の經釋の意是れなり。されば釋尊と地涌と師弟父子と云ふは尚ほ機に應ずる邊なり。眞實は一躰なり、久遠釋尊に本因本果を具し本果の方を釋尊と號して脱益を成し、本因の邊は本行菩薩道の地涌上行にして下種を成す。されば三世常恒に下種の時は釋尊御身を本因上行と成りて佛種を下し、又脱益の時は本因上行御身を本果釋尊と成して脱益を成す。此の本因本果を合すれば十界互具方名圓佛の三世遍照無作三身なり。故に佛於三世等有三身と云ふ故に三世益物の化導の始終種熟脱の最初の下種は本門の四依本因妙の上行の所作なり。此の下種の時は聞法なり、事の供佛これなし、妙法を信すれば即ち理の供佛なり。さて下種已後調熟の時分に事の供佛を用ひ、又調熟已りて得脱の時は法華に至て開權開迹して妙法を説く故に事の供佛を用ひざるなり。其の旨法師、寶塔及び神力品、陀羅尼品に分明なり云云 資料①

〔開迹顯本宗要集〕菩薩部第一〔日隆聖人御聖教〕（以下「隆教」と表記）第二卷、日隆聖人御聖
教刊行會、昭和三十六年）二〇～二二頁

とあつて久遠釈尊と上行菩薩（地涌菩薩）は機に應ずる時、師弟或いは父子の相を示すが眞實は「一躰」である。その一体である理由について、久遠釈尊は本因本果を具す仏身であつて、その本果の方を釈尊と号し、本因の方は本行菩薩道の地涌上行のことで、下種の時は釋尊は身を本因上行と成して仏種を下し、脱益の時は本因上行はその身を本果釈尊と成して脱益を成すと、これは三世常恒のことであるとされる。このことを可能にさせるのが十界互具説である。即ち久遠釈尊に本因本果を具すと言ふことは因果を具す報身であると言ふことであり、これを「十界互具方名円仏」（「十不二門指要抄」〔大正新脩大藏經〕第四六卷、七〇七頁b）の文、『宗要柏原案立』

〔大正新脩大藏經〕第七四卷、五五〇b)等は「十界具足方名円仏」となっている)と言ひ、更に久遠釈尊は三世遍照の無作三身の仏であるからである。従つて三世に亘る種熟脱三益の下種益は、本因妙の上行の所作となる。即ち上行菩薩は久遠釈尊の本因妙菩薩として衆生に下種の利益を与える菩薩となる。

本時娑婆本国土の一切衆生の心性に具わる三因五仏性は釈尊上行、これらの衆生は「理性の眷属の上行」という事

此の三世の教主は諸佛總持の本佛釋尊なり、未來滅後の唱導は上行なり、然るに佛在世の衆生をば釋尊直の形益を以て之を益し、滅後をば聲益を以て之を益す、此の三世益物の慈父は釋尊上行なり、此の釋尊上行の三世益物の所居の土は本時の娑婆本国土妙なり、此の本国土の三世の衆生は、久遠釋尊上行王子なり、故に一切衆生の心性に三因五佛性あり、三因は上行なり、果性果果性は釋尊なり、聽て三因は本因妙、果性果果性は本果妙なり、是れ當體蓮華の妙法なり、此くの如く一切衆生の心性に三因五佛性の釋尊上行の當體蓮華之を具す、是れ理性の眷属の上行なり、「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子」、及び「多諸子息」と云へるは此の心なり、此の理性上行の衆生に、妙法蓮華經を以て久遠下種せしむれば修得の上行菩薩と成る資料②

〔本門弘經抄〕第八十三卷 (原文対訳法華宗本門弘經抄) (以下刊本「弘經抄」と表記) 第九卷、日

蓮大聖人七百五十年御降誕奉讚會、昭和四十六年) 一四〇―一四二頁

とあつて「三世の教主は諸佛總持の本佛釋尊なり、未來滅後の唱導は上行」として久遠釈尊は在世の衆生には形を表して利益をなし、滅後は聲益を以て利益する、このことを「釈尊上行」と表現されていると思われる。三世益物の慈父は釋尊上行、そして此の釈尊上行の三世益物の所居は本時の娑婆本国土妙であるからこの本国土の

三世の衆生は久遠釈尊の上行王子とされ三因五仏性を具すという事である。その中三因は上行、果性果果性は釈尊、此の二つはやがてそれぞれ本因妙本果妙となる。この理性上行の衆生に久遠下種すれば修得の上行菩薩となる。即ち理性上行と修得の上行の二が説かれる。

地涌上行は久遠釈尊所具の菩薩界で最初下種の尊形

本行菩薩道時の菩薩とは、何なる尊形の菩薩ぞや。

日存聖人仰せに云く、久成の釋尊は是れ諸佛の本地、上行は是れ諸九界諸菩薩の本地なり。故に従本垂迹の第二番已下迹中の中間今日には釈尊・上行の外に迹佛の彌陀・藥師等の諸佛、迹化の藥王・觀音等の諸菩薩これあり。而るに久成の本因本果の成道已前は皆悉く唯本無作の自行の成道なる故に、無量五百塵點の諸佛ありと云ふは悉く釋尊なり。所説の法は唯妙法の五字なり。自性同體の支分は地涌上行なり。故に無始遠々の久遠成道なり。經には無量無邊の五百塵點を合して一箇の五百塵點と爲す、故に更に初なき故に無始久遠なり。天台宗に事成顯本に初めありと云ふは大僻見なり云云。仍て久遠成道の時の本行菩薩道の本因妙の修「一圓因」の菩薩とは釋尊なり。釋尊も因行の時は地涌菩薩なり。釋尊に十界を具す、九界の方は地涌菩薩なり。故に地涌上行は釋尊所具の菩薩界なり。故に是我弟子と云ひ、子弘父法と云ふ。地涌菩薩の一切衆生脱益の時は本果妙釋尊の尊形を顯し、又釋尊の一切衆生最初下種の時は本因妙地涌上行の尊形と顯る、なり。故に久遠下種の本因妙本行菩薩道時の菩薩とは、地涌上行の尊形なり。其の時の所化衆の本化眷屬と云ふも地涌菩薩なり。天台宗に本行菩薩道の菩薩とは普賢菩薩なり、本因妙の本師本佛は大日なり、彌陀な

り、薬師なり等と口傳し、結句最極口傳として薬王菩薩なり等と云ふは大僻見なり。墮獄の法門なり。之を用ふべからず。本行菩薩道の本因本果の事は觀心本尊抄の初と中とに本行菩薩道の本因をば地涌上行なりと判じたまへり云云。資料③

〔開迹顯本宗要集第一〕教相部第二〔隆教〕第四卷一〇五―一〇六頁とあって久成釈尊は諸仏の本地、上菩薩は諸九界諸菩薩の本地であつて、迹中間においては、釈尊・上行の外に迹仏迹化菩薩が存在するが、久成釈尊の本因本果の成道以前は唯本、無作の自行の成道であるから無量の五百塵點において諸佛が出現しても皆悉く久遠釈尊一仏に帰するものである。その所説の法も妙法五字のみである。久遠釈尊自性同体の支分は地涌上行のみされている、支分は「分身」の意味であらう。であるから、久遠成道の時の本行菩薩道の本因妙修一円因の菩薩は釈尊自身であり、釈尊も因行の時は地涌菩薩である。そして久遠成道の釈尊は十界を具し、その中九界の方は地涌上行とされ久遠釈尊の所具の菩薩界とされ、地涌菩薩（釈尊上行のこと）は一切衆生脱益の時は本果妙釋尊の尊形を顯し、釈尊（釈尊上行のこと）の一切衆生最初下種の時は本因妙地涌上行の尊形と顯われる。即ち上行菩薩は久遠釈尊が下種の時、衆生（機）に應ずる姿であると云うのである。従つて久遠下種の本因妙本行菩薩道時の菩薩とは、久遠の下種であるから地涌上行の尊形と成るのである。其の時の所化衆の本化眷属と云ふも又地涌菩薩とされる。本行菩薩道の本因本果の事は「觀心本尊抄」〔昭和定本日蓮聖人遺文〕七〇四、七二二頁）に本行菩薩道の本因は地涌上行と判じられていることを根拠とされている。

同体の釈尊上行は本涅槃妙の後、一体の上の師弟の相を示すのは滅後衆生の下種の爲である

本果妙十界皆成の後の本涅槃妙を唱ふる時、本果の釋尊本因の上行同體にして一體の上に師弟の相を示して、佛世に久遠下種結縁衆の上行等あり、彼れの爲めに流通を宣べて「以要言之」して下種の法を成す、これを聞ひて當座に下種の益を得て本涅槃妙未來九法界上行下種の益を得るなり、故に記の「本因果種」と云ふなり、只是れ言總意別なり、謂く本因に下種し本果に脱益滿ちて本涅槃の砌に又本因の地涌と成つて種を下すと云ふべきを、言總して「本因果種」と云ふなり、されば三世本有の儀式として、一切衆生最初下種の時は釋尊本因妙上行の尊形を示して、本涅槃妙滅後末法に出現して種を下し玉ふ、今の本因本果と云ふ本因も、疏の一の如きんば、前佛の本涅槃妙滅後末法の本因妙と口傳するなり、又一切衆生得脱の時機には上行菩薩妙覺の八相を唱へ本果釋尊の尊形を示現して佛在世の九法界の脱益を化し、又本涅槃妙を唱へ釋尊即上行と成つて滅後惡世の下種を成ずること、三世本有の化儀なり、壽量品の三世益物は此の意なり、經に「如三世諸佛說法之儀式」と云へるは此の意なり 資料④

【本門弘經抄】第七十六卷（刊本「弘經抄」第八卷）二二九―二四〇頁
本果の釈尊十界皆成（久遠釈尊）の後、本涅槃妙を唱える時、同体の本果釈尊と本因上行とが一体の上の師弟の相を示すのは、仏在世の久遠下種結縁の衆生に「以要言之」して下種の法を説いて本涅槃妙未來九法界上行に下種の益を得せしめる爲で、これを「法華文句記」第一（大正新脩大藏經）第三四卷、一五一頁b）に「本因果種」と説かれる。それは本因に下種し本果に脱益、本涅槃に又本因の地涌となつて種を下すことであると説かれる。従つて一切衆生最初下種の時は釈尊が本因妙上行の尊形を示し本涅槃妙滅後末法に出現して下種すると言ふ

ことと解釈されている。このことを上行菩薩を中心に説けば本因妙の菩薩である上行菩薩は仏在世にあつて一切衆生得脱の時機、妙覺の八相を唱え本果積尊の尊形を示現して九法界の脱益を化し、更に本涅槃妙を唱えて積尊即上行となり滅後惡世の下種を成ずと言ふことである。これは久遠積尊体具の菩薩界である上行は滅後に応生する仏即ち心身としての働きを示すものであると考えられる。

上行菩薩は本眷属であつて既に大通以前に脱益している本因妙信心堅固の菩薩で積尊体内の菩薩として本門體外には現れず冥加を加える菩薩である。

當宗の義に云く、此の四節釋は本迹の二なり。開迹顯本すれば唯初・二の二節なり。故に初・二は共に久遠下種なる故に本眷属と云ふ。此の時は本一迹多と云ふ本時自行唯與圓合の本地一佛乘なれば、此の本地一佛に十界久遠の功德を具す。九界の方は地涌上行、地涌上行即本因妙なり。佛界の方は釋尊なり、即ち本果妙なり。此の本因本果體具の十界久遠界如三千妙法の法體自性會の自性所生の地涌眷属に對して本說法妙して下種を成ず。此の地涌の菩薩に久遠の九界を具し、九界の方は理・業・願・通の眷属なり。此の理・業・願・通の九界を惣在すれば地涌應生の眷属なり。此の地涌の菩薩に對して本說法妙して佛種を下す能具の地涌の方は、本因妙の信心堅固にして退轉せざる故に、久遠下種の一生に過去爲熟近世爲脱して大通已前の本門にて種熱脱するなり。故に第二番已後中間世々番々に顯本體內に有て本涅槃妙滅後唱導を付せらるゝと雖も、本門體外の小權迹の座へ顯には出でたまはざるなり。資料⑤

【開迹顯本宗要集】教相部第四（『隆教』第四卷）一六一頁

とあつて四節の三益釈を開迹顯本すれば唯初・二の二節であり、この二節は共に久遠下種の本眷属地涌上行の事である。本地の一仏に具足する十界の九界とはこの地涌上行のことで、本地一仏の本因妙であり、その仏界は釈尊即ち本果妙である。そしてこの地涌眷屬とはこの本因本果體具の十界久遠界如三千妙法の法体より自性所生したもので、これに対して本説法がなされ下種が成ずるのであるが、この地涌の菩薩に久遠の九界を具す、所具の九界は理・業・願・通の眷屬であつて惣在すれば地涌応生の眷屬で、下種とはこの九界に本説法妙して仏種を下すことであるが能具の地涌は本因妙信心堅固にして退転せず、久遠下種の一生に過去を熟と爲し近世を脱となして種熟脱を遂げている。即ちこの能具の地涌は大通以前の本門の得脱のものである、しかしこの菩薩は結局釈尊の體内の菩薩であるから第二番以降中間世世番番には顯本の體内にあつて本涅槃妙滅後唱導を付屬されているけれども本門體外の小権迹の座にはあらわには現れず冥益をもつて衆生利益する菩薩であると説かれる。

上行菩薩（地涌の菩薩）は釋尊妙覺界體具の本有の菩薩界、本因妙九界總在の大悲闡提の菩薩である。

地涌の菩薩は釋尊妙覺界體具の本有の菩薩界にして、且く釋尊本果妙より大悲心を起して位彌下する本因妙九界總在の大悲闡提の菩薩の尊形を地涌と云ふなり。故に釋尊十界具足の九界總持の菩薩なる故に自性所生の支分本有の菩薩界なり、所詮本果釋尊の滅後下種の尊形を地涌と云ふ故に、唯々是れ釋尊の御名を替へて果より因に下るまでなり、其の身體は全く同じきなり、故に妙覺界の「其菩薩界常修常證無始無終報佛如來常滿常顯無始無終」する報佛如來體具の菩薩界なり、且く父子師弟を顯さんが爲め、妙覺が家の等覺に居する歟、此の等覺は其の實體名字即なり、故に地涌を以て本因妙の菩薩滅後下種の唱導と定め玉ふなり、然る

を且く一品二半の脱の機に應同する時、等覺と云ふなり、故に今の釋に「故九ノ下下方」文九本六ウ記に云く、此諸菩薩分ニ到ル所期ニ且云極地」文 資料⑥

【本門弘經抄】第七十四卷（刊本「弘經抄」第八卷）八五―八六頁とあつて上行菩薩は久遠釈尊の本有の菩薩界で本因妙九界總在の大悲闍提の菩薩の尊形が地涌上行であるから釈尊自性所生の支分、即ち一切衆生の下種の時にその姿を見せる菩薩で唯これ釋尊の御名を替へて果より因に下り（十界具足であるから）、其の身體は全く同じものであるが、あくまでも菩薩として釈尊滅後に下種を為す菩薩である。その意味で大悲闍提の菩薩とされる。

上行菩薩は久遠釈尊自性所生の身分の眷屬、九界總在の菩薩。滅後には本因妙の上行として滅後の衆生に上行要付の説法をする菩薩、上行要付は「以要言之」の説法であり、は十法界同体の易行の説法である

佛内證の説教の事

門流の義に云く、爾前は一向體外の説教なり、法華經の意も三五下種の邊は「本結大縁寂光爲土」にして、而も下種の心地は「發心畢竟ニテ別」して凡聖一念なる本覺の信智なる故に、内證の機に内證の法を説ひて父子一如なる處を下種と名づく、故に其の所居即寂光なり、寂光豈に内證の説法にあらずや、さて中間今日熟脱の邊は、化他の成道の邊なれば體外の説法と云ふべきなり、然るに本門八品上行要付の「以要言之」は内證の説法なり、其の故は上行は是れ釋尊自性所生の身分の眷屬なり、釋尊の御身に本因本果を具す、本因は是れ九界、九界を總在すれば上行なり、故に總すれば上行、別すれば九界なり、故に釋尊の御

身を分かつて滅後にやれば本因妙の上行なり、元より本因本果の十法界を一佛身に具足して、滅後の衆生の爲めに上行要付の「以要言之」の說法これあり、是れ即ち十法界同體の教彌實位彌下の自受法樂の易行の說法なり、故に此の内證常恒の說法とは、極善最上の法は極惡最下の機を攝すと云へえる說法なり、此くの如き「諸經永異」の本佛内證の「總在如來壽命海中」の隨緣眞如法爾法然の說法、更に爾前迹門に分絶へたるものなり 資料⑦

【本門弘經抄】第八十三卷（刊本「弘經抄」第九卷）一五九〜一六〇頁とあって、說法について、爾前は全く體外の說法、法華經の「三五下種」は内証の說法であるとし、迹中中間今日の「熟脱」は化他の成道であるから體外の說法と言うべきである。これに対して滅後に備える本門八品上行要付の「以要言之」は内証の說法と言ふことになる。何故ならば上行は釈尊自性所生の身分の眷属でこの上行菩薩への說法は内証の機に内証の法を説くことになるからである。久遠釈尊に具足する本因は即ち久遠釈尊所具の九界のことでこの九界は總在すれば上行、別すれば九界である。もともと久遠釈尊は本因本果の十法界を一仏身に具足するものであるから、その御身を滅後におけば本因妙の上行となる。従つて滅後のための「以要言之」の說法は十法界同體の教彌實位彌下の久遠釈尊の自受法樂の易行の說法となるのである。即ち久遠釈尊の體内に上行として流入する衆生は内証常恒の說法を聞くことになる、これは極善最上の法は極惡最下の機を攝するといふ說法である。

上行菩薩は仏滅後に応ずる報身體具九界總在の本因妙の應身。本仏釈尊の無緣の大慈悲である

次に本門の三身相即とは通釋別釋の二意これあり、通別の釋は上に云ふが如し、法中論三の秘密の三身の意を以て法身の上に「一身即三身、三身即一身」する三身相即なり、此の久遠の法身體具に所開爾前迹門の諸法身、多寶大日等に會せられて顯本の法身に歸し、俱に久成報身の父大王智妙の裏に有つて悲母妃の境妙と成り、父母境智冥合報中論三の正在報身より應用の大慈大悲を出生して、在世より猶ほ滅後を以て正機となす本涅槃妙を唱へて、滅後の衆生に應じ玉ふ、此の應身とは本果の報身、滅後の爲めに本因妙に垂下して滅後の衆生に應ず、此の教彌實位彌下の本因妙の應身とは、上行の無縁の大慈大悲なり、此の本因の上行とは本涅槃妙滅後の九法界なり、此の九法界を總在すれば上行なり、又九法界とは日本國の一切衆生なり、然るに本果妙より本因妙に垂下して滅後に應ずと云ふ本因妙とは上行なり、上行は九法界なり、上行の滅後九法界の能應の慈悲は上行なり、故に上行を以て報身體具の應身と爲すなり、此の時は報身の分身は上行菩薩なり、上行の分身は日蓮大士我れ等信者なり、此くの如き報中論三の本門の三身は爾前迹門に異なり、教彌實位彌下して、本地久成の慈父大王として滅後の一切衆生王子のために分身上行の應用を垂れて末法下種を成ずる易修易行の報身は前代未聞未曾有なり。資料⑧

【本門弘經抄】第七十九卷（刊本「弘經抄」第八卷）五〇三―五〇四頁
本門の仏三身の相即を説く箇所で、父母境智冥合の報中論三の正在報身即ち久成積尊大慈大悲の應用は仏在世よりも滅後にあつて、本涅槃妙を唱え終わつて滅後の衆生に應身として應ずると説かれる。この應身は報身體具の本因妙であつてこの本因妙の應身とは本果の報身が滅後の爲めに本因妙に垂下して滅後の衆生に應ずる仏身とされる即ち本因妙上行菩薩のことである。更に菩薩ではあるが、本仏報身體具の本因妙上行とは無縁の大慈悲のことであるから、本因妙の應身と云うのであるとされる。更にこの本因の上行は本涅槃妙滅後の九法界とされ、

この九法界を総在するのは上行である。又この九法界とは日本国の一切衆生のことであると説かれる。上行は釈尊滅後九法界へ応ずる慈悲の菩薩であり、その有り様は滅後九界を総在するものと説かれる。この時、報身の分身は上行菩薩であり更に、上行菩薩の分身は日蓮上人及び我等信者であるとされる。従つて報中論三の本門の三身即ち久成釈尊は滅後の一切衆生王子の爲に分身上行の応用を垂れ末法下種を成す仏であると説かれる。

上行菩薩は本果妙釈尊と団体ではあるが在世にはあつては上行即釈尊の釈尊、滅後悪人には向つては釈尊即上行の上行菩薩となつて末法下種の教主となる。

此の本覺の重と云ふは、「貪體即覺體名本覺也」にて、法性より貪體の凡地に還り、理より事に還り、界外の實報寂光より本時の娑婆三界に還つて、事寂光と照して本國土妙となす、是れ理極事遍の本覺の土なり、故に本門には在世の衆生よりも滅後の穢土穢機を以て正意と爲すなり、されば本門の序分たる涌出品の時に上行等を召し出して滅後弘經の唱導に定め、其の所付の法を壽量品に説き顯わす故に正宗と云ふ、序正既に滅後を以て正と爲す、況や流通に於てをや、是れ即ち理極事遍の「貪體即覺體」の本覺の重なり、古歌に「中々に猶を里近く成りにけり餘りに山の奥を尋ねて」とよみしは、此の本門の序正流通の教彌實位彌下の本覺の重なり、仍て壽量品の三世益物の説相を照見するに、本地の法身より久遠の事智報佛に還會し、如来秘密の本極法身より本因本果の報身に垂下して、一品二半脱益の法身高上の諸菩薩をば傍に置き、偏に滅後惡世の悪人を以て正機と爲し、本果妙の釋尊の御身を地涌の菩薩と成し、本因妙の上行菩薩と垂下して滅後の慈父唱導と成す、此の本因妙の上行薩埵、一品二半脱益の法身の菩薩に向かつては位等覺と示し、滅後唱導の本門八品「以要言之」の辺は等覺より十地十向十行初住等と下り、猶ほ相似觀行名字等と垂下して久遠

下種の時の「発心畢竟二不別」の名字妙覺一念の處に案住して、釋尊上行同體にして、三世本有として在世の機には上行即釋尊と成つて本果妙を示し、滅後悪人には又釋尊上行と成り、本因妙の妙覺名字一體の教彌實位彌下の本覺の位に居して末法下種の教主と成るなり、其の時一品二半脱益の法身の菩薩も現在の脱を以て久遠本種に還歸して本因妙上行と成り、又上行と同じく等妙より住前乃至名字の信者に垂下して上行體内に流入して所開の座に列し十界久遠して皆悉く本因妙に住して而も本因本果因果俱時末法下種の本尊を顯わす 資料⑨

『本門弘經抄』第八十六卷（刊本『弘經抄』第九卷）三九七〜三九八頁

本覺とは「貪體即覺體名本覺也」にして法性より貪体の凡地に還り、「理」にとどまらず理を極めれば「事」に通するところの随縁事円を言う。法華經本門は在世の衆生よりも滅後穢土穢機を正意とするから、従つて本門の序分涌出品に上行等を召し出して滅後の弘經の唱導に定め、其の所付の法を壽量品に説き、序・正・流通共に、滅後を以て正とす、これは理極事遍の意で「貪體即覺體名本覺也」の本覺の事である。従つて本門の序正流通の教彌實位彌下はこの本覺のことである。この事から壽量品の三世益物の説相を見ると、「本地の法身より久遠の事智報佛に還會する」とは、即ち本極法身より本因本果の報身に垂下して在世脱益の法身高上の諸菩薩をば傍に置き、偏に滅後悪世の悪人を以て正機と爲すから本果妙の釈尊の御身を地涌の菩薩と成して、本因妙の上行菩薩と垂下して滅後の慈父唱導を成つて下種をなすのである。此の本因妙の上行薩埵は久遠下種の時の「発心畢竟二不別」の名字妙覺一念の處に案住して、釋尊上行同體であるが、三世本有として、在世の機には上行即釋尊と成つて本果妙を示し、滅後悪人には釈尊は上行と成つて、本因妙の妙覺名字一體の教彌實位彌下の本覺の位に居して末法下種の教主と成る。この時一品二半脱益の法身の菩薩も現在の脱を以て久遠本種に還歸して本因妙上行

上行菩薩についての一考察（清水俊匡）

と成り、又上行と同じく等妙より住前乃至名字の信者に垂下して、上行體內に流入して所開の座に列し十界久遠して皆悉く本因妙に住して而も本因本果因果俱時末法下種の本尊の相を顯わすのであると説かれる。

上行菩薩は滅後末法衆生の爲に現れる本門の四依の菩薩

「遣使還告」とは多釋あり、其の中に一の釋に云く四依の菩薩なり、此の四依の菩薩を以て使人と爲し、小權迹本の諸經を弘めしむるなり、觀心本尊抄に云く、四依ニ有四類ニ云云 四類とは小權迹本の四依なり、正像は小權迹の四依なり、末法は本門の四依の上行等なり、「自惟孤露」とは滅後正像末の小權迹本の得益を明すなり、「毒病皆癒」とは地涌弘經の十界皆成十界久遠の廣宣流布なり、「其父聞子尋便來歸」とは未來の應化なり、仍て合譬の大意此くの如し云云 資料^⑩

【本門弘經抄】第八十一卷（刊本「弘經抄」第八卷）六三八頁
【觀心本尊抄】に壽量品の經文の「遣使還告」を釈して四依の菩薩をもつて使人となす。即ち滅後にあつては釈尊自ら法を説くことが出来ない故に使人を遣わすのである。使人とは四依の大師で、この四依に小・權・迹・本の四類ある中、正像は小權迹の四依。末法は本門の四依の上行等であるとされる。

結

御聖教において上行菩薩について管見を述べてきたのであるが上行は單なる一人の菩薩ということではなく久

成釈尊と一体(資料①)・同体(資料②)、或いは釈尊の自性所生支分(資料⑥)、釈尊体具の本有の菩薩界(資料⑥)・本眷属(資料⑤)。又本仏の応身(資料⑧)として滅後、釈尊に替わって衆生利益する菩薩と説かれる。

この久遠成道の釈尊は本因本果の二妙を具えた仏身で本果は釈尊、本因は上行菩薩で仏界・菩薩界(九界)を具足する十界具足の仏身である、ここを「十界具足方名田仏」(資料①)という。「具足」は本来「互具」のこと他所の引用では「具足」である)即ち本因本果を具す報身仏(資料⑧)である。この報身仏の本因妙を「上行」とされる。御聖教には本仏釈尊を「釈尊上行」と書かれることが多くあるのは本因本果を具足する報身本仏という事を表していると思われる。又この菩薩は本仏釈尊の三世種熟脱の教化において下種益を担う大悲闍提の菩薩(資料⑥)される。大悲闍提は衆生救済のために涅槃に入らないものであるが、種熟脱三益において下種は必ず上行菩薩が担うから下種を被る者達にとつては上行は常に菩薩のままの姿であるということ、涅槃に入らない菩薩であるから大悲闍提と呼んだのであろう。又大悲闍提と呼ばれたのは、上行と一体である本仏釈尊の無縁の大慈悲を表したものとも思われる。

久遠成道の時本地の一切衆生は皆本眷属(本化上行)となった。即ち三因・五仏性(資料②)を備えることとなったのであるが、この衆生具足の三因の方を上行、果性果果性の方を釈尊とされる。従つて上行とは一切衆生を総在する菩薩で九界総在の菩薩(資料⑥)といわれる。また上行は久遠釈尊具足の本因妙であるから、久遠成道の釈尊体内の九界となる、これが久遠釈尊所具菩薩界(本眷属)である。この九界総在の上行(体内の本眷属の)の中に退転(退本取迹)し流転するものが現れた。この衆生の爲に久遠釈尊は垂迹して熟脱の教化をなして久遠下種に立ち返らせた、これらの衆生は滅後正像二時までとされる即ち本已有善のものは迹中に法華を聞いて熟されて久遠成道を唱えて久遠下種に還り上行(本眷属)となる、この時本仏は本果釈尊の姿となつて脱益に応

じたのである。これに対して資料⑧⑨にあるごとく法華經本門の序分涌出品に上行を召して滅後の唱導に定め、その所付の法を寿量品に説きあらわすことは、序・正・流通共に滅後を正意としている。この観点から三世益物の説相を見ると久成釈尊は滅後悪世の悪人に対して、その身を釈尊の慈悲の姿である地涌上行の菩薩となして滅後の慈父唱導と現れたとされる。寿量品の「遣使還告」は本門の四依即ち上行菩薩の事であると説かれる。

以上。上行菩薩について管見を述べたが上行付属・末法下種の具体的な有り様については後に考える。

〈キーワード〉 上行菩薩 本因本果 十界具定 九界総在 大悲闡提